

秋田県で食の6次産業化プロデューサーに挑む赤沼秀夫氏の取組

農業と食を結びつけて新たな地域活性化をプロデュース！！

赤沼 秀夫氏（秋田県）

1 赤沼秀夫氏について

赤沼秀夫氏はこれまで、首都圏で外食産業やスーパーマーケットの店舗開発等を担当し、16年前に秋田に戻ってから、自ら「食彩房」を主宰。以降、秋田の食に関するものであれば、生産から加工、食料品の販売から飲食店の開業までほとんど全てに関わってきた。

秋田県内のみならず、青森、岩手、宮城、新潟などで食品商品開発に奔走している赤沼秀夫氏である。

今後は『食Pro.』レベル4の取得を目指して、これまで以上に、さらに農林水産業や食品産業およびそれに関わる各種産業との新たなビジネスや連携構築に向けた活動を邁進したい、と話している。

●赤沼氏の行動理念

「生産者と消費者は、明日の食と農をつくるパートナーであり、地域おこしのパートナーでもある。生産者や加工業者が異業種でネットワークを組み、連携して特産品を開発する手法が重要である。」



赤沼秀夫氏

2 赤沼秀夫氏的主要な活動実績

(1) 平成18年度地域資源∞全国展開プロジェクト事業

秋田県三種町森岳地域の、生産量日本一である「じゅんさい」を全国展開すべく、「秋田森岳じゅんさい鍋」として商品開発を支援し、活性化に寄与。



秋田森岳じゅんさい鍋
森岳じゅんさい鍋ホームページより

(2) 平成19年度地域資源∞全国展開プロジェクト事業

「おもてなし育成事業」での食と特産品の研究開発に関わり、特産である、ポリフェノールが多く含まれている「松皮」を利用し、既存伝統商品の「松皮もち」とは全く異なる「松皮ゆべし」・「松皮サブレ」の商品開発を支援。

(3) 平成20年度地域資源∞全国展開プロジェクト事業

西馬音内「若返り舞プロジェクト」での「若返り＝長寿」を基本コンセプトに食を通じた長寿セットの商品開発を支援。



若返りギフトセット
若返り舞プロジェクト商品より

(4) 日本の食を広げるプロジェクト「ナマハゲの里!! 活発男鹿」

食のモデル地域協議会（2013年9月～2014年3月）において、地場産食材を活用した創作惣菜と宿泊施設の献立（メニュー）の開発ならびに調理指導。

創作総菜開発の狙いは、ア) 男鹿産食材の活用促進、イ) 男鹿産食材のブランド化・情報発信、ウ) 男鹿産食材の活用・発信による魅力・個性ある食都男鹿づくりという目標に対し、地元男鹿産食材を活用した総菜の創作商品開発を行い、地元スーパーと連携したイベントを通じて地元農水産品の魅力再発見と地産地消の推進を図る為に、伝統的食材、料理法などを取り入れながら、和の惣菜にこだわらず洋風アレンジしたりするなど、子供たちやシニア世代にも食べやすいレシピを開発するのが主眼だった。

赤沼氏は「高齢化が進むなかで、懐かしい調理法と食感、健康栄養成分が含まれる地場産食材の需要は今後益々増大する予感がある。安全・安心・ヘルシーな米作り、野菜作り、水産物、更にはその料理（和風、洋風、中華風）や加工食品は、時代の要求に応えられる日本の食そのものである。」と話す。



地元男鹿の伝統料理である
あんぱら餅を使った
あんぱら餅のチーズボール風



実際に試験販売を実施

2 秋田ノーザンハピネッツとの取り組み

赤沼氏は以下の上新城ノーザンビレッジの取組に賛同し、6次産業化プランナーとして、6次産業化総合化事業計画の認定を指導・支援した。

この活動を通じて、プロスポーツと農業が結びついた新しいビジネスモデルの構築と展開が図られることを赤沼氏は期待している。

(1) 秋田ノーザンハピネッツとは

秋田ノーザンハピネッツは、秋田県を本拠地として2010年より日本プロバスケットボールリーグ（bjリーグ）に所属するプロチームである。運営母体は秋田プロバスケットボールクラブ株式会社。秋田県初のプロスポーツチームであり、2014年シーズンはリーグで準優勝という成績を収めている。

（一部Wikipediaより引用）



(2) 農業法人(株)上新城ノーザンビレッジと

ハピネッツヴィレッジ構想

秋田市の郊外に位置する自然豊かな上新城地区。そこで、6次産業化の新たな取り組みが始動している。それが「ハピネッツヴィレッジ構想」。

廃校になった旧上新城中学校周辺を拠点に、地元農業者やプロバスケットチーム・秋田ノーザンハピネッツが協力して、上新城地域住民の人たちと一体となって、農業を中心とした地域の活性化を図ろうとする取り組みのことである。

この構想の“幹”になるのが、2014年1月に設立された農業法人(株)上新城ノーザンビレッジ。同社取締役の奥田慎一郎さんは「ハピネッツと連携し、そのブランドを活かして、秋田の豊かな食をもっと県外の方に知ってもらいたいです。同時に地元の方との交流、子どもの食育の場としての機能も果たしていければいいですね」と話す。

秋田県 赤沼 秀夫 氏

構想が具体的に動き出したのは2014年春。まずは旧上新城中のグラウンドで畑作りを開始し、ハピネッツカラーのピンク色のブルーベリーや、学校給食用のじゃがいもなどを周辺地域の小学生と一緒に植えた。今後、収穫した農産品の加工や農家レストランの運営、チーム選手と市民の交流などを行えるようになるのが当面の目標という。



(株)上新城ノーザンビレッジ取締役の奥田さん

(3) 総合化事業計画の認定

秋田の主力産業の農業を復興するために地元プロスポーツチームである秋田プロバスケットクラブ(株)=秋田ノーザンハピネッツのスポーツブランドの躍動するイメージを活用し、県外へ秋田の食の魅力を発信していくことが目標。

その一環として旧上新城中学校の校舎を改修し、「Cheer&Live」をコンセプトとした農家レストランを経営し、農家と地域を応援「Cheer」し、活気「Live」づけ、地域の新鮮な野菜や自社生産の無肥料・無農薬野菜とライブエンターテイメント要素を融合した空間を創る。また、自社生産した野菜を使用することで、生産から販売まで一貫した経営を確立し事業の安定化を図ることとしている。

(4) 主な取組み

自社で生産した野菜、地域の新鮮な野菜やその加工商品を、旧上新城中学校の廃校舎1階を活用して直売所や秋田ノーザンハピネッツの試合会場（遠征先含む）や練習場で直売する。

また、秋田ノーザンハピネッツの選手が商品PRを行い、スポーツの「健康」イメージを活用することで商品価値を高め、県内外問わず、新規顧客の獲得につとめることにしている。

(5) “夢”を耕す若い力

“夢が詰まった”畑を実際に管理しているのが、同社社員の柳 智仁さん、藤田裕貴雄さん、伊賀 翔さんの3人（いずれも20代！）。東京出身の柳さんと広島出身の藤田さんが秋田にやって来たのは、「農業を仕事にしたい！」という強い思いからだだった。



(株)上新城ノーザンビレッジ柳さんと、藤田さん

入社後、早速グラウンドの開墾から始まった農作業。土を掘り返し、近くの川でタンクに水を汲んで持ってくるなど、慣れない寒さの中ではその作業もひと苦勞。でも、地元の方にこの地の土壌の質を教えてもらったり、トラックや重機を貸してもらったりと、みなさんの温かい協力を得ながら、日々前に進んでいるとのこと。「毎日が楽しい。成長する作物や自然の変化に、日々発見があります」と柳さん。藤田さんも「農業の良さを子どもたちに伝えたいです。じゃがいもを植えた飯島南小の子どもたちが、興味を持ったようで、学校でも苗を植えてくれた時はうれしかったな」と笑顔で話してくれた。

でも、「まずは順調に収穫できるように畑作りを成功させることが大事。その上で6次産業化に取り組み、多くの人に商品を食べてもらいたいです。プレッシャーもあるけど楽しいから頑張れる。気を引き締めてがんばります！」と2人とも力強く答えてくれた。



ハピネッツの選手とじゃがいも植え付け

(6) 「畑の学校」での出会いに期待

地元として支援するハピネットヴィレッジ構想協議会事務局次長を務め、昨年の構想の立ち上げから関わっている渡辺一幸さんは、「上新城は、地域のまとまりは良いけど、外との交流が今まで少ない地区だったと思います。この構想を通して、さまざまな方と交流し、自然豊かな上新城を広く知ってもらいたいですね。今までにない、新たな展開がこの地区に起こればうれしいです」と期待を込めて話す。

そして、今後は地元のみならずこの取り組みに全面的に協力して盛り上げていきたいと、その次のステップを見据えている様子だった。



構想を支える地元協議会の渡辺さん

さらに、食農連携コーディネーター（FACO）としても活躍している赤沼氏は、「6次産業化プランナー、FACOにしても一定の『資格』的要素は必要で、それが食の6次産業化プロデューサーではないか。まだ『6次産業化』自体が古いようで新しい産業で、その意味で、大中小にかかわらずこれからは産業として世界に羽ばたこうとしており、大きな可能性を秘めているといえる。自分は昨年、県内企業の輸出支援の要請を受け、ハラール認証を受けるためマレーシアを訪れた経験がある。今後、このような機会におけるプロデュース能力はもちろんのこと、公的な検定制度としての『食Pro.』は有効ではないか。」

6次産業化の一層の普及・推進と活性化を図るために、食の6次産業化プロデューサーレベル4取得に向けた熱い思いを赤沼氏は語ってくれた。



平成27年3月

執筆：株式会社河村地域活性研究所 河村 守信
(食の6次産業化プロデューサー レベル4)

3 赤沼氏の食Pro.取得にける熱い思い

赤沼氏が食の6次産業化プロデューサーを知ったのは、同じ秋田県の6次産業化プランナーで、レベル4の取得者でもある河村がきっかけとなっている。

秋田県は「食の宝庫」と言われながらも、農産品の加工（高付加価値化）は立ち後れており、秋田県の食品製造業の出荷額は全国44位（平成20年現在）、東北6県の中で比較した場合でも、規模の小ささが顕著となっており、東北でもっとも製造出荷額の多い宮城県に比べおよそ1/6程度という現状に対して、6次産業化の推進・普及が、今後の秋田県の発展に大きく影響する。

「6次産業化」という言葉自体、聞いたことはあるが意味は知らないとする人が多く、「食の6次産業化プロデューサー」がその推進役になり得るのではと赤沼氏は話す。